「有情活理」「動けば明日が見えてくる」

経団連社会保障委員長
明治安田生命保険会長
根岸秋男（ねぎし あきお）

私の座右の銘は「有情活理（ゆうじょうかつり）」と「動けば明日が見えてくる」である。

まず、「有情活理」だが、これは「理屈も大事だが、情があってこそ理屈が活きる」という意味だ。20代半ば頃、大学からの親友に教えられた言葉である。私がその親友と先輩の3人で飲んでいて、議論が白熱し、私と先輩とでけんかになった時、親友が間に入って、「人間は情の生き物だ。有情活理と言ってな。情を介さないと理屈は通らないものなんだ」と諭してくれた。私は、大学で数学を専攻し、アクチュアリー（保険数理の専門職）として生命保険会社に入社した。そして、13年間、数学を駆使して保険会社としての健全性の確保と公平な運営を支えるアクチュアリーの職務に従事した。その後、志願して全くの畑違いである営業現場に飛び込んだのだが、結果として、アクチュアリーの経験から理の土台が培われ、営業現場に出たことで情の大切さが刻み込まれた。そもそも生命保険は、アクチュアリーが精緻な計算を行い提供する、理によって作られたものだ。一方、お客さまにとっては、保険金を受け取る方への想いを託すものであり、情によって成立する。そして、営業現場では、その情を誠実に受け止め、お客さまを思いやり、情を持って接することが求められる。生命保険会社こそ、理と情のバランスが重要である。

もう一つの座右の銘は、35歳で営業所長職に挑戦した時に、先輩社員から贈られた「動けば明日が見えてくる」という言葉である。受け身ではなく自分から動けば、良い悪いは別として、違った景色が見えてきて、成長につながるという意味だ。この言葉の根底にある〝何事にも挑戦する姿勢〟は、自由で自主性を重んじる母校、川越高校の雰囲気のもとで培われたと思っている。高校卒業後も、大学で数学を究められそうにないと挫折しかけた時、「それなら社会に出てどう貢献できるだろうか」と考え、アクチュアリーを目指そうと切り替えた。入社後も「アクチュアリーとして考えた会社の収益構造の課題を現場で確かめたい」と考え、営業所長職に挑戦した。私は今でもその信念に基づき、会社の後輩たちに、「身の丈に合った背伸びをしよう」と語りかけている。背伸びをして何かを達成したら、違う景色が見える。そこから、もう1回背伸びをする。「動けば明日が見えてくる」からこそ、階段を一歩一歩上るように挑戦することの大切さを伝えていきたい。